

板をはいて沢を辿る

## 南会津 黒谷川源流域山スキー

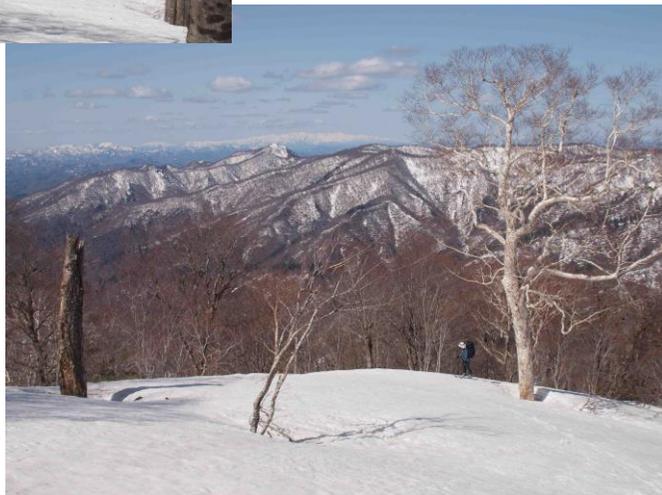
丸山岳への山スキー。メルガマタ沢からの丸山岳はガスガスでなにも見えなかった。山深いのに、わらじの集中山行と重なり賑わいの山となっていたのだが、妄想のふくらむピーク。今回は深遠の名峰を訪れるにふさわしい、沢をつないで滑る。袖沢源流域ミチギノ合宿からさらに奥へと。沢をつないで行くには、春の強い光がさえぎった。

5月2日(土)：晴れ

小豆温泉からバスで小立岩へ。バスが早めに来たので板を抱えて走ったら転んで唇を切り流血。ツアーの出鼻をくじかれたがキンとした冷え込みに体が引き締まり、さらに気も引き締めで行こう。春の会山行で来た安越又川からの入山。空はぬけるように青く春の輝きにあふれている林道を先へと進む。山毛櫨沢を過ぎたところで積雪が一定してきたので板を履く。



履いてブナ森をのぼっていく。気持ちのいい尾根がつづき、そのまま、のびやかなブナのある小沢山へと導かれる。藪に身体を沈めて小休止。さて、期待のお滑りタイム。北側直下の藪を北東に回り込むとのっぺりしたブナ森の尾根が広がる(上写真:後方は稲子山)。斜度が増し、藪っぽくなったが横



【日程】

2017年5月2日(火)～  
5日(金)

【メンバー】

田辺(L)、田宮(RSSA)

【地形図】

内川、高幽山、会津朝日岳

【記】田辺



小沢の右岸尾根で小沢山にとりつくが、最初が急でももちろん雪は付いていない。板を背負ってのトレーニング。テレ靴のこぼが滑るので、モンキー登りでこらえる。マンサクの花にやっと一息。1100mほどで板を

滑りをまじえて小手沢1150mに下りる。そのまま北尾根に取り付き1406から西に向きを変え稲子山へと。南北にのびる稜線はゆったりとした白い砂漠となりザラメ斜面を登っているのが悲しくなるが先へと進まなくては、丸山岳は遠い。北側へ回り込んで稲子山北峰へ。会津朝日岳の背景に飯豊が斜光に浮かび上がり、もちろん越後の山並みが見渡せる。そして、下梯子沢へ下るが、結構な斜面で藪っぽい。重荷のキックターンが怖いので慎重に高度を下げ、沢床に降りたらあとはテレテレと板を滑らす。黒谷川出合いまでの予定だったが、1000mが限界のようで沢が元気でいて。上梯子沢出合いの手前を幕とする。つまりC1予定地に行けない。丸山岳でのC2は儚い夢となり予定変更。明日からは迂回ルートで丸山岳を目指すことにする。折れた心をミズナラ、ブナの広がる台地が心鎮める。水も簡単にとれるし、焚火でタンパク質も補給し。満天の星の下、就寝。



5月3日 (水) : 晴れ



岸尾根にとりつく。さらに先にいくと上梯子沢左俣は滝があったので、リカバリーを下流側にとったことに胸をなで下ろしながら、シラビソの尾根を過ぎればブナ森、

ミソサザエのさえずりで目が覚める。お世話になった台地に御礼をいい、登りやすい沢を選んだのが間違い。巻き気味に尾根にのり進むが、なんだか方向が違う。下梯子沢との中間にある違う尾根にのってしまった。一度沢においてて対面の尾根にとりつく。その沢までがけっこう厄介で、藪っぽく斜度もある西面。ザックころがしを行い、下梯子沢へ下りる。沢が出ていた。ブナ森からの湧水で喉を潤し、慎重に尾根を確認して、上梯子右



まったりとした尾根となり、白い砂漠が広がる1496の主稜線へと続く。滑りたい斜面その2 (左上写真)。坪入山手前でおっきなザックの山スキーヤーに会う。ヘルメットに熊注意報のシール。両手に

セルフアレスト。丸山岳に向かうらしいが、西に続く尾根の状態がよくないので、歩きの2人組は進んだが、梯子沢経由で向かうと言っている。我々より重装備の重荷。ただ、沢が出ているので予定変更したとわれらの動向を伝え、お互い気をつけて進むようにと別れる。山毛櫛沢山から入った二人歩きPと会ったと情報を交換する。

坪入のピークを巻くようにさっさと行く田宮に怒りを覚え、坪入でクトーをはずし、シールをとって鞍部まで進む。さきほどの情報の通り、いやらし感のある尾根。以前のミチギノ側から入ったときより状態はよくないのか緊張感高まるが、滑る準備をすれば、お待ちかねの時間。すてきなスギソネ沢をすべり、やっと山スキーにきた実感の湧くダイナミックな斜面に喜びの雄叫びをあげる。斜度がなくなるが開けた沢型は笑いが出る。足元は波なみなので板が走る。左岸尾根の一番低そうなところを選んで、坪足で登りちょっとした藪をのりこし滑り込めば、そこは南会津の上高地。大きな栃の木の本元には雪が消えており、手招きされたのでそこを幕に。昨日にもましてミソサザイツきの夢の幕場。ツェルト、タープ。カラカラの細めの薪は豊富にあり、着火剤は昨日つかってしまったので、尾根越えて採取した樺の木肌と新聞紙で苦戦。薪はかわいているのだが、小さな沢地形が交わった台地状になっているので、風が一定しく怪しげな焚火。ミソサザイのさえずりが終わるころには食事も終わり、星も瞬き、月も出たので明日の丸山岳にむけて、早めの就寝。

#### 5月4日(木)：晴れ

今日もまた、ミソサザイのさえずりで目をさます爽やかな朝。しあわせの時間である。東実沢出合いは上高地さながらの瀟洒な開けた空間になっている。西実沢は下見をしていたが思っていたより沢がでている。朝一の傾斜のある右岸トラバースは緊張する。左岸へのSBを探しながら、予定ルート通りの1698.3火奴尾根につきあげる



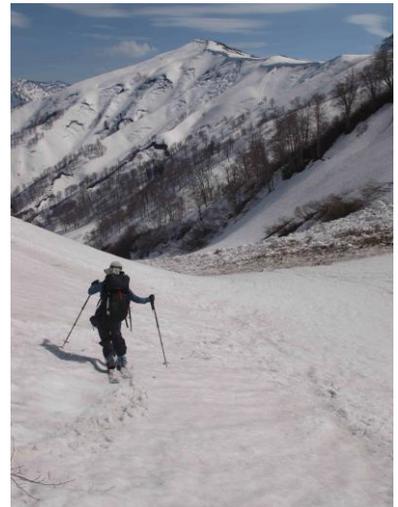
沢の出合い手前に賞味期限本日のSBを見つけ、息をとめて渡り尾根に取り付いた。この尾根、しょばなはなだらかだったが、平らな針葉樹林帯は藪。尾根の左右はちょうど落ちるところなのと雪はぱっくりと口をあけている。板を背負って藪をいくのが精神的には楽。ウグイスとカタクリが藪に華やぎを与えてくれるが、それを何度も繰り返している内にトップを行ってもらっている田宮の気力が相当やられていたようだ。火奴尾根手前で高い位置の赤布があった。残雪期のルートなのだろう。西実入沢上流から白い尾根がのびていた。

火奴尾根からは白い砂漠。シールでさくさく登

れるゲレンデさながらの斜面が続く。滑りたい斜面その4。それからは、丸山岳をみながら稜線漫遊。さすがに主稜線、さえぎるものはなく主要山岳が続いている。まっくらこげの歩き2人組に会う。坪入定着の昨日聞いた方々。沢をつないでというテーマは、稜線直下のバックリクラックがあるのでどこでも滑れそうではなく、登りで時間がかかりすぎたこともあり、



おとなしく主稜線ピストン。サクサクと快適に丸ろやかな頂をもつと表現された姿を眺めながら平らな丸山岳まで。わたしのための山なので360度滑れる！ただ、時間も時間なので、雪氷を食べたらシールオフして貴重なお滑りタイム。メロウにテレターンを刻む(写真上)。そして、理想のようにシューと行けない主稜線。再度シール装着で戻る。1723から西実沢に南尾根から沢へと入る。広大な斜面のザラメタイム。右手に梵天岳を見ながら快適の一言。デブリも数カ



所あったが難なくこなし、波なみ沢床はスピードが出て風が気持ちいい(右写真：前方は梵天岳)。ここまで来ればBCまで戻るだけで、朝のSBが残っていれば問題ない。田宮が以前きたときは、沢が出ていなかったらしいが、今シーズンは1000mが分岐点。また息をとめてのSBを渡り、無事に左岸に移り、シールをつけてトラバース。出合いまで戻ってきて東実沢。幕場までの徒渉もそろそろ正味期限が切れそう。ミソサザイに癒され、焚火の前で最後の夜をのんびりと思っていたが、昼間の緊張からか、すっかり調子がよくない田宮に「今夜はカレー」で留めを刺してしまった。一人焚火を盛大に煽いで月灯りの下、南会津の夜がふけていく。

5月5日(金)：晴れ

里に帰る日。ミソサザイ幕場はくせになりそうだが、ふかふかのBCを与えてくれた栃の木に御礼をいい、東実沢を遡る。真っ白だったという田宮の記憶は当てにならないので、ゆったりとした



台地が広がっているが徒渉点というか安全に渡れるSBを求めてよれよれと遡上する。ミソサザイが応援してくれる。朝なのでクトーをつけていたのだが、それがひっかかって、くだらない所でプチ滑落。頭から沢に向けて滑ったが落ちなくてよかった。C3予定だった1020周辺からはスケールが大きくなり雪壁に囲まれ、さながら越後の中ノ岳滝ノ俣チックになってきた。この辺りから熊と釣り師のトレースが散見する。黒

谷林道を使って釣り師が入るのだろうか。さて、ここからの登路は日ざしが強くなるので、雪尻崩壊が心配され、素直なルートにすると東よりにつきあげる。尾根にあがって藪にはまると時間がかかるので、休憩しながら検討をし、行きながら考えることにする。東俣に入るが、このまま沢に行く勇気がなく、右岸尾根に進む。幸い、針葉樹林帯があったが、迂回できる尾根で、高度を上げると左右共に沢状は危険な様相だし、雪尻崩壊していくし、セオリー通りで正解。ブナ森で灌木がではじめるタイミングだったので、尾根をはずすとクラックがあり、緊張しながらだが、シールで高度を上げる。1754に突き上げる南支尾根からはまたまた白い砂漠を登る。滑りたい斜面だらけ。そして、1754からはシートラで慎重に。左手には初日に滑ったスギソネ沢とミチギノ沢の稜線を「怖くない」といい聞かせながら、一步一步前に足をだす。坪入山まで戻れば、あとはと思ったが、まだまだ遠い。テントは一張りあり、人の気配はなかった。きっと丸山岳いつてんだろうかね。すでに昼すぎてしまった。ここからの稜線歩きがシュルンドとハイ松とシャクナゲの三つ巴堪能コースになっており、時間がかかってしまう。窓明山に出る手前の藪で後ろからガサガサと熊!!!とおもったら、真っ黒な男性。「ゆっくりどうぞ」と白い歯がキラリン。しかも、藪から出た瞬間に下半身がシュルンドにハマったおばさんを助けていただいた。というか、田宮とその方は「山スキー百山」の記録で盛り上がり、その「あの、落ちてるんですが」というまで助けてもらえなかったんだね。写真を取りあいつこして、三岩岳のすばらしいゲレンデをみなながらも先は長い。歩きの人はさくさく行くのに、滑って、背負ってを繰り返しているドンガメな我々。すると、ああ、思い出の登山道。この登山道が見つからずに、藪を彷徨った2016年の夏休み。そうそう、そのときの保田橋沢を滑る予定だったのだが、クラックが入っていて怖い。お腹もすいたし、疲れたし、三岩岳の避難小屋泊も選択肢にあがったが、怪しい風が吹き始めていたので、ともかく降りたかった。最後の力を振り絞り、三岩の肩にのったのが日が傾きはじめるころ。ただし、何度かきいているので、雪さえ有れば下りは早い。テレマークターンするよりも、安全第一で下る。しかし、雪の状態もよく爽快にとぼす。雪がガタガタ波なみになり、ちょっとクラストがはじまるころに藪がでてきたが、ぎりぎりまで板で行ける所までほぼ15分で700m。あとはシートラで無になって下るが、イワウチワの花道が可憐にさきほころび、夢の中の登山道は南会津山行のラストを飾ってくれた。



